愛知学泉大学「国際人基礎力養成講座」

── 慈済科技大学における“Service Learning”への参加 ──

A Report on a Training Course for Fundamental Competencies for Global Citizens at Aichi Gakusen University
:Studies in“Service Learning”at Tzu Chi University of Science and Technology

成戸　浩嗣　　Koji NARUTO

概　要

2012 年に愛知学泉大学(愛知県豊田市・岡崎市)は台湾花蓮市にある慈済技術学院(現・慈済科技大学)と学術文化交流協定を結び、同大学で行なわれる“Service Learning(Humanities & Transcultural Program)”に学生を参加させている。同プログラムは年 2 回行なわれ(春季は中国語、夏季は英語で行なわれる)、様々な国から学生が参加する。愛知学泉大学は 2012 年からこのプログラムに参加しており、本年度で 4 回目(いずれも英語によるプログラム)となる。その内容は各種のレクチャーや体験講座、社会活動、事前に与えられた課題についての発表などであり、慈済科技大学の創始者である證厳法師(女性)の教えにもとづきながらも宗教色の少ない実践的なものであると同時に、愛知学泉大学がここ 10 年来取り組んできた「社会人基礎力」養成の目的に沿ったものともなっており、その国際版と位置づけることができよう。引率者である筆者が学生と共に参加した 2016 年 8 月 16 日(火)～26 日(金)のプログラム内容は、

① 参加者による英語でのグループごとのディスカッション(課題である歌・踊りの発表に向けての相談)
② 台湾および研修参加者の母国を知るためのレクチャー・発表
③ 中国語(国語)・中国太鼓の初心者向けレッスン
④ 書道・茶道・華道の体験
⑤ 解剖学実習への献体(慈済大学には医学部がある)・慈済「大愛」活動の紹介
⑥ 「慈済発祥の地」にある寺院「静思堂」、慈済大学(花蓮市街地)にある「静思ホール」見学
⑦ 学内図書館にある台湾原住民資料館の見学
⑧ “Service Learning”に関するレクチャー、「慈済リサイクル・ステーション」での資源ゴミ仕分け作業
⑨ 退役軍人高齢者施設の訪問・交流
⑩ タレント・コンテスト(チームごとに歌・踊りを披露し競い合う)
⑪ 学習成果についての口頭発表(7 分間/1 人)

などから構成されている。本学からは学生 4 名が参加した。参加者総数 52 名(内引率者 9 名、学生 43 名)、国別では日本(愛知学泉大学、愛知学院大学)のほか、中国(鞍山師範学院、江南大学、蘇州大学、遼寧科技大学、アモイ華廈学院)、マレーシア(Rahman 大学)、タイ(Chulalongkorn 大学)で、それぞれ引率者 1～2 名と学生 3～6 名からなっている。慈済科技大学からは看護学科を中心とする 33 名の学生と教職員が対応にあたった。

このプログラムに参加する意義としては、第一に、研修に参加することで英語によるコミュニケーションの経験を積むことが挙げられよう。今回の研修参加者の出身国の中では、英語が使用されているのはマレー

シアのみである(同国ではマレー語、英語、中国語が話されている)。過去には英語を母語とする参加者もいたようであるが、今回は純粋な英語のネイティヴはいなかった。但し、多くの異なる言語使用者がコミュニケーションをとろうとする場合、いずれか一つを共通言語とすることとなるため、自然な英語のスキルを高めるというよりは、参加者をつなぐ共通言語としての意味合いが大きい。第二に、慈済科技大学をも含めた慈済の関連組織(財団法人「佛教慈済慈善事業基金会」など)の様々な活動を知ることによって、国内外の教育において今や普通にとり上げられるようになった「環境保全活動」、「ボランティア」、「多文化共生」、「リサイクリング」、「社会福祉」などの問題について今一度考え、その実践例を学ぶということである。これらが愛知学泉大学の「現代マネジメント学部」[1)]に限らず、様々な大学において行なわれている教育内容とも深く関わるテーマであることは言うまでもない。

キーワード

1．環境保全活動　environmental preservation activity
2．ボランティア　volunteer
3．多文化共生　multicultural symbiosis
4．リサイクリング　recycling
5．社会福祉　social welfare

目　次

1　慈済科技大学の沿革(『大愛灑人間 ── 證嚴法師的慈濟世界』、『愛をこの世に注ぐ 慈済のご案内』の要約)
2　プログラムの内容
3　参加者の様子
4　慈済科技大学の対応
5　研修全体の印象
6　大学周辺の様子
7　言語環境
8　おわりに

1. 慈済科技大学の沿革(『大愛灑人間 ── 證嚴法師的慈濟世界』、『愛をこの世に注ぐ 慈済のご案内』の要約)

創始者である證嚴法師(Dharma Master Cheng Yen)は、1937 年に台湾中西部の台中県清水鎮に生まれた。子供のいなかった叔父夫婦のもとに養子に出され、幼少のころより利発であったという。15 歳の時に母が胃を患って手術しなければならなくなったが、当時、開腹手術は極めて危険なものであった。「私の命が 12 年縮まってもかまいません。どうか母を助けて下さい…」と祈り、奇跡的に手術せず服薬のみで回復した。以後、肉食を断つ。23 歳の時に父が脳卒中で急逝し、大きな悲しみに包まれることとなる。「父はどこへ行ってしまったのだろう？ 人は死んだらどこへ行くのだろう？」という疑問を抱くようになり、仏門への道を模索するも修行の場はなかなか見つからなかった。25 歳の時に、台湾東部の花蓮県秀林郷の普明寺において自分で髪を落として修行を始めたが、「受戒」するためには剃髪得度をしてくれる師匠が必要であった。受戒のために訪れた台北の臨済寺でそのように告げられ途方にくれていたところ、台湾仏教界きっての名僧である印順導師(日本の大正大学で博士号を取得した学問僧)に出会い、4 人しか弟子をとったことのないこの名僧に懇願しその弟子となる。法名は“證嚴”、号は“慧璋”。普明寺に戻って修行を継続する。「一日作さざれば一日食らわず(中国唐代の名僧である百丈禅師の修行精神)」の信条を守りつつ、出家した 4 人の弟子とともに自給

自足の暮らしをする。1966 年、弟子の父親が胃出血で入院し、見舞いに訪れた病院で、先住民の女性が早産で訪れたが保証金を払えず担がれて帰る情景を目にする（当時の台湾では入院には保証金を払わなければ治療を受けられなかった。現在の日本でもたまにある）。證厳法師は 500 人の慈善団体をつくることを決意し、1966 年に 5 名の出家弟子と 30 名の信者（大部分が主婦）からなる「仏教克難慈済功徳会」を結成、その後の事業の出発点となる。「富める者を啓発し、貧しき者を救済する」という発想で活動の輪を広げていった。活動内容としては、慈善、医療、教育、人文のほか、国際援助、環境保全運動、骨髄寄贈、地域ボランティアという事業構想を立て、1970 年代からこれらの基礎を徐々に固めていった。

活動の主なものとしては、1999 年 9 月の台湾中部大地震（死者 2,413 名）におけるボランティア活動、倒壊した小中学校 51 校の再建事業（2003 年までに完成）のほか、2009 年 8 月の台風 8 号によって大水害にみまわれた台湾南東部での救援活動（食事・清掃・慰問金・就学援助）などが挙げられる。災害援助のほか、誰もが医療の恩恵を受けられるようにする「医療の普遍化」を実現するための事業にも取り組んでいる。治療費を払えないために命の危険にさらされている人が大勢いることのほか、当時の台湾東部には十分な設備のある総合病院がなかったため、1986 年に花蓮市に「慈済病院」を設立した。同病院が始めた「保証金の免除」制度は政府をも動かし、衛生署（日本の厚労省にあたる）から全国の病院に対して「保証金制度の撤廃」が通達されるにいたる。その後、台北市郊外の「慈済台北病院」をはじめとして各地に数か所の病院および分院が成立され、山岳地帯には専用車で定期的に往診に向かっている。

教育事業としては、幼稚園から大学院までの一貫教育を行なっており、1989 年の「慈済護理専科学校（慈済看護学校、後に慈済技術学院、さらに慈済科技大学となる）」の開校、1994 年の「慈済医学院（慈済医科大学、後の慈済大学）」の開校のほか[2)]、慈済大学の付属幼稚園、同小学校・中学校・高等学校が設立されている。

慈済科技大学の設立にいたる経緯はおおむね以上のようであるが、「慈済（＝慈悲済世）」の精神をもった医療・教育をはじめとする諸活動によって社会に貢献する人材の育成を目的としており、テレビの「大愛チャンネル」では毎日早朝に、證厳法師や「慈済人」の活動などを報じている。

2. プログラムの内容

研修は慈済科技大学が用意したスケジュールに沿って行なわれる。今回は 8 月 16 日（火）～26 日（金）の午前・午後であった。あらかじめ課題が与えられており、①自分の国 or 大学についての紹介（英語）、②「タレント・ショー（歌・踊り）」の内容、③7 分間スピーチ（英語）を出発前に用意し、データを先方に送ることが求められる。現地に到着した翌日から以下のような内容の研修が始まった。

オープニング・セレモニーでの民族舞踊

グループ・ディスカッション風景

8/16（火）　午前：「オープニング・セレモニー」（慈済科技大学生による拳法演武・太鼓・獅子舞・踊り、学長あいさつ、担当者の紹介など）

午後：「タレント・ショー」の打ち合わせ（他大学の学生と相談、チームは日本人同士とは限らない）

：学生同士の異文化間交流・花蓮市街でのショッピング、各自で夕食

/17（水）　午前：レクチャー「台湾について知る」、発表「自国の文化紹介」

午後：「中国語会話のレッスン」、「中国の太鼓」

/18(木)　午前:「中国書道」、「中国茶道」の体験
午後:「中国華道(Flower Arranging)」の体験
/19(金)　午前: DVD「献体者(Silent Mentor＝もの言わぬ先生)」の鑑賞・意見交換
: 慈済「大愛」活動の紹介
午後: 市内の寺院「勝安宮」見学
/20(土)「太魯閣（タロコ)」国家公園の観光(今回は台風接近のため中止となり、七星潭・鯉魚潭・花蓮糖廠の観光および見学に変更)
/21(日)　宜蘭、礁渓、羅東への日帰り旅行
/22(月)　午前: 慈済発祥の地「静思堂(慈済科技大学の近辺)」の見学
午後: 慈済大学(花蓮市街地)内「静思ホール」の見学
/23(火)　午前:「台湾原住民資料館(慈済科技大学図書館地下)」の見学
: 台湾原住民のアクセサリー製作を体験
午後:「台湾原住民の衣装に着替えて踊ってみよう!」
※「阿美(アミ)族」の衣装を着た慈済科技大生の踊り、参加者による民族衣装の試着・写真撮影など

台湾原住民資料館にて

/24(水)　午前:“Service Learning(服務學習)”のコンセプト説明
:“Veterans Care Center(退役軍人の高齢者施設)”への訪問・交流
午後:「リサイクル」活動についてのレクチャー
:「慈済リサイクル・ステーション」における資源ゴミ仕分け作業
/25(木)　午前:「タレント・コンテスト」のリハーサル
午後:「タレント・コンテスト」
/26(金)　午前: 学習成果の発表(7 分間/1 人)、「お別れセレモニー」、修了証授与
正午: お別れ昼食会

学習成果の発表

「タレント・ショー」は、初日の午後に行なわれた打ち合わせも含め、各国からの参加者が一つの目標に向けて意見交換し、合意にこぎつけ、さらに練習を通して交流を深めることをねらいとしているようである。具体的なテーマを与えることにより、たとえ英語の力が不十分であったとしても最後まで粘り強く意思疎通に努めることを余儀なくされるため、みな必死である。最終日の発表に向けて、毎日の研修終了後に宿舎で練習に励んでいたようである(楽しいから続いた！)。

「書道・茶道・華道」の体験は、研修の中でも異彩を放つ。書道は日本のそれとは筆の持ち方が違い、先生の示した詩を自分の紙に書き写そうとするものの、なかなか字にならない。何枚か写した後、やがてそれぞれが好きな文句を書き始めた。筆者も「行雲流水」、「喫茶去」、「日日是好日」、「国姓爺鄭成功」、「風林火山」などと書いた。茶道体験では４人一組で座り、説明に従って１人が亭主となって、小さめの急須と茶碗を使用して他の３人にふるまった。ここで用いられたのは緑茶ではなく紅茶であった。慣れぬ茶事の所作に、亭主役の動きはロボットのようにぎこちない。それを見て笑い転げる周辺の人…。午後の華道ではさすがに参加者にやや疲れがみられたが、与えられた花と竜舌蘭のような葉で創造性たっぷりに自分の作品をこしらえていた。

フラワー・アレンジメント

最初の学外ツァーとしては、花蓮市内の道教寺院「勝安宮」の見学があった。同寺院の建物自体は比較的新しいものである(民国 38 年＝1949 年建立)が、古代神話中の女神「王母娘娘(ワンムゥニァンニァン)」をまつったもので、文殊菩薩や普賢菩薩、孔子をはじめとする多くの神仏像もおさめられている。正殿には中央に「王母娘娘」、左右には観音像のような立像が見えた。両脇の像は顔が異様に長いのが特徴であり、全体に仏教寺院とはかなり趣が異なる。参拝者の中には、ゲップのような音を出してお参りする人もいたが、道教寺院の参拝作法なのであろうか。もともと中国の人々は道教の神や仏教の仏、民間から起こった信仰の神々もあまり区別せずに拝み、それらに現世利益を期待する傾向があり [3)]、何をお願いするかによって担当の神仏が異なるらしい。この寺院には数々の神仏像がまつられていたが、明らかに「孫悟空」と思われる像もあった。中国人の心を知るうえで宗教に関する知識は不可欠なのであろう。

DVD「献体者(Silent Mentor＝もの言わぬ先生)」の鑑賞は、慈済大学医学部における解剖実習のための献体者の話であり、医師を養成するために欠かせない献体の促進や、ご遺体が文字通り自分たちにとっての「先生」であるという考えのもと、丁重に取り扱う様子を拝見した。これに関連して、慈済大学の「静思ホール」を訪問した際には、同大学の病院における難病治療の実績について紹介した資料コーナーを見学した。ちなみに台湾では儒教思想が根づいており、体に傷をつけることに抵抗があると同時に、一般の人々には骨髄移植に関する正確な知識もなかったため、證厳法師は骨髄移植の知識を広め、台湾で初めての骨髄バンクへの骨髄提供の呼びかけを行なっている。聞くところによれば、同大学は献体登録者数が世界最多であるとのこと。「静思堂」見学においては、ここが慈済の発祥の地であり、證厳法師がここに小さな小屋を建て、弟子と共に自給自足の生活をしながら内職もして救済物資の配布などを行なっていた様子が紹介された。ここには多くの尼僧が生活しており、寺にこもって僧侶としての勤めを果たすだけではなく、「社会に対して何ができるか？ 何をすべきか？」を模索しつつ毎日を送っている(この点は空海の考え方に通じるものがある)。かつてはこのような慈済の活動に対し、「本来の仏教とは違うのではないか？」ということも言われたようであるが、法師の考えはゆるぎないものであり、宗教や民族を問わずに手を差し伸べ、協力し合うという姿勢をつらぬいてきた。国際災害援助や医療奉仕などを通しての貢献は、アメリカ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、シンガポール、中国、ハイチ、さらには中東・アフリカなどにおよんでいる。

課題発見・問題解決のレクチャー

「リサイクル」活動については、わざわざ台湾に行かなくてもよさそうに思えるが、かつては日本でもごみの分別はなかったし、国が異なれば対応も異なってこよう。何かが参考になると思われる。例えば、NHK ラジオ『アンニョンハシムニカ? ハングル講座』2005 年 1 月号には、ホテルに歯ブラシ、歯磨きのような使い捨て用品を置かない(シャンプーやリンスもない)、スーパーのビニール袋が有料(当時の日本では無料)、食堂の爪楊枝がジャガイモの澱粉でつくられている(豚のえさとして使用するため)などの話が載っているが、国が違えばリサイクル活動に限らず、社会生活のあらゆる場面で対策も異なってくる。慈済が手がけるリサイクル活動も環境保全

を念頭に置いたものであり、身近なところでは新聞紙やペットボトルなどのリサイクルや街でのゴミ拾いを行なう一方、買い物袋の持ち歩き、ビニール袋や使い捨て食器の使用を減らすなどの呼びかけを行なっている。2006 年には、企業家組織である「慈済国際人道援助会(TIHAA)」が、環境保全ボランティアの回収したペットボトルを再生資源としてブランケットや衣類を開発、救援物資として配布している。

3. 参加者の様子

本学学生４名(男子１名、女子３名)は、研修中に体調を崩すこともなく、他大学からの参加者や慈済科技大学生との交流を楽しんでいた。食事の時も各自が離れた席に座り、日本人同士でかたまることはほとんどなかった。宿舎としてはキャンパス内の学生寮(致美樓)があてがわれた。1 部屋 3～4 人で生活し、どの部屋にも慈済科技大学生 1～2 名が同居した。本学学生 4 名のうち、1 名は愛知学泉大学の姉妹校であるカナダのカピラノ大学での留学(4 か月)経験者、他の２名も英語に興味があり、さらに他の１名は慈済科技大での長期留学(１年間・中国語)予定者であった。研修中の態度も良好であり、引率者から注意する必要は特になかった。このような場合に必ず発生する遅刻や迷子がなかったのは、引率にあたった筆者としてはありがたかった。毎日のスケジュール(9:00～16:30)は現地の気候を考えればかなりハードであった。ちなみにテレビの天気予報によれば、今年の夏は 37℃を超えた日が連続 71 日間もあり、ここ数年で過去最高とのこと(その後更新か？)。部屋の湿度はエアコンなしの場合 71%。しかし、学生たちは一日を終えた後も外に出かけ、夕方からの時間をそれぞれに満喫していた。ちなみに、宿舎の門限は 22:00(土・日は 22:30、開門は 6:00)である。

他大学の参加者としては、大多数を占める中国からの参加者を筆頭に、マレーシア、タイ、日本からの学生がおり、朝・昼には一緒に食事をとることもあってか、すぐに打ち解けたようである。また、今回のプログラムは英語で行なうことを前提としていたものの、大多数が中国からの参加者であるため、現場では中国語が飛び交うことが多かった。ただし、研修を統括した慈済科技大の朱芳瑩氏や林家瑩氏、進行係をつとめた謝麗華氏はいずれも英語に堪能であり、各種行事や見学には慈済科技大生、同留学生も英語通訳にあたったため、英語を学んだ学生が参加するための言語環境としては、特に問題なかったのではなかろうか。

「自国の文化紹介」において、愛知学泉大学チームは「日本の着物紹介」を行なった。パワーポイントを使用してどの着物がどのような場合に着られるかを一つ一つ紹介していった。本研修のハイライトである「タレントショー(歌・踊りのコンテスト)」は最終日に行なわれたが、何をやるかは出発前に考えておき、「自国の文化紹介」と同様、その内容を出発前にデータで送付しておくことになっている。初日の午後に行なわれる“Cross-school Discussions(＝talent contest preparation)”においては、それをたたき台として他大学のチームと相談し、最終的にどのメンバーと組んで何を発表するかを決定する。愛知学泉大学のメンバーは愛知学院大学チームと合同で「ソーラン節」を歌い踊って喝采を浴びたほか、何人かは多国籍チームにも加わって歌・踊りを披露した。今回の優勝は、学泉大学のメンバーが加わった多国籍チーム「ファッション・ベイビー」であった。本学学生にとっては、英語にせよ中国語にせよ、日本語を解さない人たちに囲まれて日々を過ごしたことになり、これは貴重な体験である。言葉があまりわからない、あるいは全くわからなくても理解し合い、共通の目的に向けて協力していかざるを得ないのである。仲良くなってみると、「ああ、言葉がもっと通じたらなあ…」と思うわけであり、帰国してから本気で外国語を学ぶ動機ともなろう。短期留学の効果である。

タレント・ショーでのきめポーズ!
「I♥ 台湾！」

DVD「献体者(Silent Mentor＝もの言わぬ先生)」の鑑賞では、会場である International Conference Hall が静まり返った。献体者のご遺体を前にお祈りをささげた後、解剖実習に取り組む医学生の様子や、献体者の生前の写真や職業が記された納骨堂らしき場所のシーンが映し出されると、全体が厳粛な雰囲気に包まれた。放映終了後には積極的に意見・感想を述べる者が続いた。続いて上映された「大愛」活動の紹介では、地球環境の様々な危機的状況が紹介された。環境破壊の緩和策の一つとして、慈済は菜食を推奨している。DVD では、菜食主義のパワー・リフティング選手の紹介なども行なわれた。慈済関係者が菜食を行なっているのは、肉・魚を口にするためには殺生を避けられないということのほか、野菜の生産で生じる温室効果ガスが肉・魚を生産する場合に比べてはるかに少なくてすむという科学的根拠にもとづく[4)]。

退役軍人高齢者施設での交流風景

退役軍人高齢者施設の訪問は、とりわけ得がたい体験である。慈済科技大学生は定期的にこの施設を慰問に訪れているようであり、入所者から「えくぼのあるそこの子、髪がのびたねえ。切らなきゃいけないな」などと言われていた。ここではいくつかの参加大学が歌や踊りを披露したほか、入所者に話しかけ交流する時間がもたれた。みな普通の高齢者ではなく、台湾の防衛に長年寄与してきた軍人だった人たちである。中でも、93 歳で足を高々と上げて素早く歩かれる姿に我々は驚き、敬服した。施設のホールで行なわれたこの行事に参加した入所者の方々は、終始友好的な態度で我々の訪問を受け入れてくれた。遼寧科技大学からの参加者は、入所者たちの長年の苦労をたたえ、あいさつの最後に全員でお辞儀をした(中国人がするお辞儀は日本人の場合よりも重みがある)。ちなみに、同施設がある敷地内にはかの孫文の巨大な像があり、さらに「中正記念堂」もある。この建物について慈済科技大の学生に話しかけてみたところ、「中正」が蒋介石を指す(※中正は名、介石は字)ということを知らなかったので、この話題はそこで終わった。世代の移り変わりとはこのようなものか。

リサイクル活動は、花蓮市内にある「慈済」経営の「リサイクル・ステーション」まで赴き、事前説明を聞いた上で資源ゴミの仕分け作業にとりかかった。暑い午後のことであり、参加者にとって楽なものではなかったが、全員が積極的に行なった。作業場にあった膨大な未選別のゴミも、50 人ほどの参加者によって次々に選別されてゆき、二時間足らずでほぼ片付いた。意識が変わること間違いなし。

研修中唯一の土・日は、研修活動は休みである。土曜(20 日)には、渓谷から平野にいたる景色の美しい「太魯閣(タロコ)国家公園」観光が予定されていたものの、残念ながら台風の接近によって中止となった。台湾を代表する景勝地であり、一度は見ておきたいところであるが致し方ない。かわりに海岸風景の美しい「七星潭」、池と山が織りなす景色が趣深い「鯉魚潭」、かつての日本による製糖事業の流れを受け継ぐ「花蓮糖廠」を訪れることとなった。「花蓮糖廠」の隣には多くの土産物売り場が軒を連ねており、その一角では、阿美(アミ)族の民族衣装を着た女性と少女が歌いながら CD を販売していた。少女のおすすめは、「原住民歌曲 —阿美族語篇—(聽見台灣的美 音樂文化出版社)」。阿美族の伝統歌曲を現代風にアレンジしたものである。ショッピング・コーナーの裏手には“台糖 366 蒸汽機車(SL)”が展示されていた。製造年 1948 年とあり、サトウキビを運んだものらしい。「花蓮糖廠」に向かって行くと小さな資料館があり、明治時代に新渡戸稲造が台湾において製糖業に着目しその発展に貢献があった旨が紹介されていた(新渡戸の胸像も飾られている)。日曜日(21 日)は宜蘭、礁渓(温泉の町)、羅東に行くこととなった。礁渓では、町の一角にある「親親魚(キスする魚)／温泉魚」に足の角質層を食べさせるコーナーで一休み。見かけは金魚の「小赤」だが、無数に泳いでいる水槽の中に足を入れるとたちまち群がってつっついてくれる。足のかかとが「大人気」となっている参加者もいた。人によってはパニック状態となる興味深い代物である。羅東では夜市を散策したが、人の多さが半端ではなく、迷子にならぬよう数珠つなぎとなって移動した。露店の中には「章魚小丸子／章魚焼(たこ焼き)」を売る店もあったが、時間の

関係上味わうことはできなかった。

4. 慈済科技大学の対応

研修参加者の部屋には、慈済科技大生 1～2 名ずつが同居し世話をするほか、実習室を借りての朝食・昼食の用意、市内の諸施設への見学、市外への日帰り旅行の際には細やかな配慮をみせてくれた。常に我々の様子を見ながらかゆいところに手が届く対応をしてくれた。筆者の場合、市外の日帰り旅行で羅東の夜市を歩いていたところ、目線の先にある廟(大須で言えば万松寺のような感じの)をじっと見ていると、すぐさま「行きたいですか?」と聞いてくれ、かの「達磨大師」の“神像(神仏となった姿)”、“形象(生前の姿)”を祭った廟で「般若心経」を唱えることができた(我が家の仏壇にまつられている脇侍は達磨大師)。本研修の企画・運営にあたられた慈済科技大学の先生方や事務職員の方々のご苦労も随所で目にした。最終日のお別れセレモニーでは、若い職員も学生とともにダンスや歌を披露してくれた。プログラムの運営のほか、参加者や引率者から個別に用事を頼まれることも多かったと思う。筆者の依頼にも迅速に対応していただいた。その他、挙げればきりがないので詳細については割愛する。

ところで、慈済科技大学では教職員、学生ともに制服を着用することが義務づけられており、髪型も清楚な感じにすることが求められている。夏季の学生用制服は、白襟にグレーの半そでシャツと紺のトレパンで、シャツは名古屋市内にある仏教系の某名門中学の制服を連想させられる。学内では卵を除き肉・魚などの動物性の食事をとってはならず、アルコールやタバコ、台湾人が好んで噛む檳榔(びんろう)の実もご法度である(いずれも学外では自由)。短期研修中の朝食・昼食はいずれも学内でいただいたため、肉・魚は抜きであった。内容としては、

おかゆ、豆乳、卵のサンドイッチ、ハムサンド、ビーフン、アメリカンドック、ご飯、肉まん、パン(ドライフルーツ入り)、味噌汁(豆腐入り)、グアバ、スイカ、薏仁(ハトムギ)のゼリー etc.

であり、人によって感想は様々であろうが筆者には満足のいくものであった。上記のうち、「ハムサンド、アメリカンドック、肉まん」などは、何を使ったかわからないがそれらしいものが入っており、言われなければ気づかないと感じた。この点は日本の精進料理もそうであるように、香り、味ともにほとんど違和感がない。菜食の輪を広げるために、慈済ではこのような食品を開発・商品化しているのかも知れない。

5. 研修全体の印象

研修内容について簡潔に言うと、台湾および参加者出身国の紹介・体験、慈済科技大学の創始者である證厳法師および関連団体の紹介や各施設における見学・活動、参加者による課題発表ということになる。宗教色はほとんどなく、慈済については社会活動をする NPO 団体という印象を受けた。また、中国からの参加者が多かったことで、最初は英語でやりとりしていた他の参加者たちも、後半には中国語の単語や短いフレーズを口にするようになっていた。研修そのものについては、人間関係でややこしい話を耳にすることもなく、みな仲良くやっているように見受けられた。これは珍しいことであると思う。参加者が多くなると必ずしもこうはいかないであろう。また、慈済科技大学の学生は日本語を知っている人が多くないか、ほとんどいないように思われた。彼女らをはじめ参加した他国の留学生たちも、みな面白がって日本語を口にし、覚えた。彼らが覚えた日本語の一つに「じ～じ」というのがある。本学からの参加者が口にしたこの言葉はあっという間に広まり、マレーシアの学生も喜んで口にしていた。日本語は難しい。「じじ～」と「じ～じ」ではニュアンスが全く違う。中国語であれば“老大爷(おじいさん)”、“老头儿(じいさん)”、“老头子(じじい)”という使い分けがあるようなものである。

慈済科技大学が何をねらいとしてこのような行事を企画したかはともかく、慈済の存在およびその活動が各国の人々にさらに広く知られる結果となるのは間違いない。また、自国の文化を発表するコーナーにおいて、中国の江南大学などはしっかりと広報活動を行なっていた。若者向けのドラマ仕立ての DVD を持参し(同大学の広報課制作)、美しいメロディーの歌に合わせてカラオケ映像のように大学生活が映し出される大がかりなものである。アモイ華廈学院も大学のパンフレットと粗品を配布していた。そのような時代である。

研修の参加者数は過去には 100 名を超えることもあったようであるが、今回は 52 名であった。本プログラムにおいては、引率者といえども学生と一緒にプログラムに参加することとなる。おかげで最終日

には学生とともに「修了証」を手にすることができた。以下に本学参加者のコメントを紹介する。

学生Ａ（現代マネジメント学部３年男子）

：他国の学生との共同生活で日本語以外の言語でのコミュニケーションをとる経験から得たものはとても大きく、自分を見直すことができました。また、プレゼンテーションやグループ発表に向けてチーム全員で力を合わせて完成させた体験においては、達成感や感動を覚えました。加えて、ナースに関することやリサイクルに関することに焦点をあてて学び、これらは自分にとってのすばらしい知識となりました。今後はそれらをできる限り広めていけるように努力したいと考えております。慈済の学生たちは忙しい中でいやな顔ひとつせず、常に私たちのことを気にかけ、話しかけてくれたりしました。自分よりも年下の年代の子たちがあれだけしっかりしていることに驚きました。このプログラムを通して、あらゆる面で学ぶことはすごく多かったと思います。今後は自分が日本人としておもてなしをしたいと考えております。

学生Ｂ（現代マネジメント学部２年女子）

：自分は１年の長期留学（中国語を学ぶ）の予定であり短期留学にも参加しましたが、有意義でした。英語は得意ではないけれど、慈済の子たちが常につき添い、話しかけてくれたので毎日を楽しく過ごすことができました。

学生Ｃ（家政学部２年女子）

：今回初めての海外でしたが、想像以上の刺激を受けました。一言で言うと、すごく楽しかった。期間もちょうどよかったです。言語面では英語にもっと触れたかったけど、十分です。精神面は鍛えられた気がします。朝ちゃんと起きてご飯を食べ、部屋を出るときはきれいにして、時間通りに行動する。本当に大事なことを学びました。親元から離れたことがなかったので、その点は結構しんどかったですが。自分の今後に関わる２週間でした。この経験を忘れず、次につなげたいです。

学生Ｄ（短大１年女子）

：慈済の子たちはみな面白くて優しいし、気が利きます！ 頼りがいがあり、バシバシ頼っていました。（この企画を）今後もぜひ続けてほしいです。

6. 大学周辺の様子

花蓮市は人口約 10 万 5000 人、台湾における３大国際港のひとつであり、大理石の町でもある。台北からの列車（特急で２時間あまり）が到着する「花蓮新駅」で降りると、ホームや地下通路が大理石でおおわれており、何とも豪華である（慈済科技大図書館の床も総大理石張り）。「慈済科技大学」は市の郊外に位置し、正門には「佛教慈濟科技大學」と書いてある（花蓮市街地には別に「佛教慈濟大學」がある）。雲のかかったいくつかの山を望む風光明媚な場所にあり、慈済の学生に言わせれば「好山，好水，好無聊！（景色がよくてつまんねえ!）」となる。山々の姿は、筆者の故郷である岐阜市の長良川から北を望んだ百々ヶ峰（どどがみね）の風景と重なる。正門横にはファミリーマートとセブンイレブンがあり、広いスペースでテーブル席が用意されている。大学から向かって左側に商店街が続いており、日用品の購入や外食には便利である。キャンパス内および周辺の通りには黒の中型犬が放し飼いとなっており、犬の好きな人には快適な環境かも知れない。犬がコンビニの店内で寝ていることもある。一様におとなしいが、たまに吠えてくる個体もいる。近所に“花蓮縣立游泳池（花蓮県営プール）”があったので行ってみたが、深さが 1.4m以上もあって水中ウォーキングはできない。市内に通じるバスはなく、タクシーを利用する（花蓮新駅まで 170 元、10 分程度）。両替は市街地にある台湾銀行まで行かなければならない。地元の人たちはスクーター（100cc 程度）を利用することが多く、２人乗り、時には３人乗りで疾走する姿を見かける。子供は母親の前に立って乗っている。時には犬も乗っている。コンビニに新聞を納入する業者は、ステップに新聞を踏みつけて乗っている。毎朝、スクーターで出勤する主人の後を全速力でついていく犬がいる…。台湾ならではの光景である。大学から 15 分ほど歩く間は、左右に商店が立ち並んでいる。ホテルや軽食を売る店、食堂、コンビニ、檳榔（ビンロウ）を売る店、ドラッグストアなどなど。立ち止まってメモを取っていると、後ろから「ハロ～！ ハロ～！」と小さな女の子があいさつしてくれた。途中の三叉路には市場があり、様々な魚や野菜、マンゴやパパイヤ、グアバなどのフルーツが並んでいる。露店で“蔥油餅（ネギ焼）”を売っている人がいたので立ち寄ってみた。売り子のお姉さんは気さくな人で、「私は 40 歳で子どもが二人、7 歳と 13 歳で…」と和やかな雰囲気に。しばらくするとご近所

のおばあさんもあらわれ、「私はね、若いころ日本の北海道に行ったことがあるんですよ。いつだったっけなあ…。忘れたね。ハハハ…」。地元の人とつかの間の交流が楽しめた。向かいの露店では明らかに「今川焼」と思われる焼き菓子を売っていた。「よし、今度来たときはあの店で!」。その後、訪れる機会はなくそれっきりとなった。

研修期間は、おりしも花蓮市長補選の最中にあたり、市街地に出ると候補者およびスタッフの呼びかけや人の出入りが盛んな選挙事務所、選挙カーなどが目に入った。バスやタクシーの車体、ビルの壁面にも候補者の写真入りポスターが貼られ、いやおうなしに選挙ムードをかきたてられる。新聞によると、ある候補者のスタッフ用Ｔシャツを着た数人が不適切な行為を働いたようであるが、当該候補者は自分の陣営とは無関係の「選挙妨害」であると訴えているとのこと。開票日は我々が帰国する 27 日(土)であったので、帰国時点で結果はわからなかった(当選は国民党候補の魏嘉賢氏、田智宣前市長の妻で民進党候補の張美慧氏は健闘するもおよばず)。

7. 言語環境

引率者として参加した筆者は中国語が専門(中国語統語論・日中対照言語学)であるが、台湾に行くのは初めてであった。現地では「国語」、「台湾語」が話されていることは知っていた[5)]。台湾にもともと居住していた先住民族の人々が話す固有の言語もあり、家族内で使用言語が異なるケースも存在するようである[6)]。テレビの放送や車内放送は国語と台湾語で行なわれる。国語は一部聞き取りにくいかと思いきや、標準的な発音で安心した。研修中に行なわれた中国語のレッスンや現地の人々の話す言葉から判断すると、“學生(xuéshēng)”、“沒關係(méiguānxì)／不客氣 (búkèqì)＝どういたしまして”などには、大陸の「普通話」の発音にある「軽声(アクセントなし)」が用いられないようである。中国語の教科書でおなじみの“小～(～さん／君)”のような表現もないと聞いた。話によると、かつてのように、台湾語を話す人々(本省人－17 世紀初頭に中国南部から移住した人々)と北方語を話す人々(外省人－1949 年に国民党政府が台湾に移った時に大陸から移住した人々)とのあつれきは今では少なくなっているとのことであるがどうであろうか。また、長年の政策の結果、国語の普及率は極めて高くなっているものの、ここ 30 年来は台湾語を使用しようという機運が高まってきているようである。大陸よりも話し方がやさしいと感じた。大陸ではどなるような大声で話す人が少なくない。

町を歩いていると様々な看板が目に入り、“便當(べんとう)”、“定食”、“勝丼”、“親子丼”、“茶碗蒸”など、明らかに日本語がそのまま使われていると思われる単語が少なくない。時々目にする“鐵道”、“場所”、“便所”などももとは日本語とされている。“本場所禁止吸菸(この場所は禁煙)”の表示は、「本場所中は禁煙」と読み間違えそうで、微笑をそそられる。「いったいどこまでが中国語で、日本語か？」滞在中ずっとつきまとっていた感覚である。いずれにしても、これらの語からは過去の日本による台湾支配の影響が強く感じられる。怪しげなものも多い。大学近辺の日本料理店の一つに「京郁」というのがあり(「京都」の間違いか？)、そのウインドーには「うノメニ」とあった。「『うノメニ』とはなんぞや？」。連れの先生と店に入りメニューを見ると、「地獄うノメニ」の文字が目に入った。外国ではよくあることなのであろうが、夢をかきたてられる。「うノメニ」とは「ラーメン」のことであった。文字の形や角度の誤りからこのような語が誕生したわけである。また、日本のテレビでも紹介されているように、台湾に限らず、国産商品に日本語をあしらったものは珍しくないようであり、何とも不思議な気持ちになる。紙面の無駄になりそうであるが、面白いので以下に紹介する。女性の顔の手入れ用ミニバサミの袋に書いてあった奇妙な日本語である。

きれいです

私は美しいツールの創造を要して美しくて化粧の効果を終わります。S. J. 厳格な品質の標準的な製作の販売

日本語をデザインとして使用しているのであろうが、日本における店の名前や商品名に使用されている英語・フランス語にも同じようなノリで使われているケースがあるのではなかろうか。フランス語の場合、意味が分からない方がむしろ高級感を感じそうだ。そもそも日本のケーキ屋に入ってメニューを見ると、英語とフランス語がごちゃ混ぜになっている。こうなると、下手に英語やフランス語が分からない方が幸せかもしれない。

8. おわりに

わずか11日間の研修ではあったが、参加者一人一人が得たものは少なくないと思う。どんなことに驚き、感動し、何に力づけられたかは各人各様であろう。短期間であっても若いうちに外国での生活を体験することは、その後の人生に少なからぬ影響を与え、成長の糧となる。今回の研修においては、それまでの人生では経験したことのない環境に身を置いて、各自が自分のできることをしていった。専門外の領域で教員ができることには限界があるし、学生は自分なりに様々なことを吸収し、自ら成長していくのである。また、人文を重視する慈済の姿勢は、理系の学部を中心としながらも、人間らしい心をもったスペシャリストを養成しようという理念にもとづくが、このような理念が参加者にも共有されたであろうことは想像に難くない。本学から参加した 4 名の学生諸君が自主的かつ積極的に研修を全うしてくれたことに感謝するとともに、本研修で得たものを今後に生かし、有意義かつ充実した人生を送ることを祈っている。最後に、證厳法師の語録である『静思語』から、我々の日常生活に役立ちそうなものをいくつか紹介しておく。

己を尊重する人こそ、勇んで自分を縮めることができる。

いつまでも過去の功績にこだわっていると、頭を低くすることができない。

自分自身を許したその時から、その人は怠惰になってゆく。

一番見極め難いのは自分自身である。

足るを知る人は度量が広い。度量が広いので人に対しても事に対しても争わない。

海を埋めてしまうことはできても、人間の小さな口はいくら埋めても満ちることがない。

健全な両手がありながら働こうとしない人は、手がないのと同じである。

たとえ自分はただ一本の小さなネジでしかなくても、固く締まっているかどうか注意して、十分に機能を発揮せねばならない。

他人には寛容に、話す時は細心の注意をはらって。

自分自身を過小評価することはない。人はだれしも無限の可能性を潜めているのだから。

注

1）「現代マネジメント学部」は「経営学部」、「コミュニティ政策学部」を基礎として、より時代に沿った教育を目指して設立された。後者においては 2003 年度から 4 回にわたって海外研修講座が行なわれており、研修先としてフランス（2003 年度）、デンマーク（2005 年度）、オーストラリア（2007 年度）、ドイツ（2009 年度）が選ばれ、テーマはそれぞれ「フランスのコミュニティを知る」、「高齢者・障害者福祉、環境保全・農業の実態を知る」、「先住民族および新しいマイノリティーのコミュニティを知る＆ユニークな生物相の保全実態を知る」、「自動車産業と環境・エコロジーの取り組み」となっている。フランス研修については成戸 2009 を参照。

2）「慈済科技大学」には看護学科、物理治療科、幼児保育科、放射線技術科、医務管理科、会計情報科、情報工学科、教養教育センターが、「慈済大学」には医学部、生命科学部、人文社会学部、教育コミュニケーション学部、医学大学院、生命科学大学院、医学情報大学院がある。

3）『岩波 現代中国事典（「台湾の宗教」の項）』を参照。

4）『耳が喜ぶフランス語』:128-129 には、食肉生産にはそれが料理に提供する以上のたんぱく質が必要であり、動物自体が大気の温度を上昇させる温室効果ガスを大量に発生することから、温室効果ガスをほとんど発生しない昆虫食が食糧危機を回避する一つの方法であるという内容の文章が収録されている。

5）「国語」は中国の北方語を基礎とした標準語をもととし、「台湾語」は台湾海峡をはさんだ対岸にある中国福建（古称では閩）南部で使用される閩南語（びんなんご）の流れをくむ。他には広東語や、かつて大陸の北方から南方に移り定住した客家（はっか）とよばれる人々の客家語などが話されている。客家についての一般向け書籍としては、高木 1991 がある。中国語においては、文字で書けば同じでも方言間の発音の相違が大きい。成戸 2008:99-100、同 2010:116-118 では、中国語の方言と共通語、客家方言、少数民族言語についてふれた。

6）台湾の先住民族は、阿美（アミ）族、太魯閣（タロコ）族、

排湾(バイワン)族、布農(ブヌン)族、魯凱(ルカイ)族をはじめとする 9 種に区分されている。17 世紀以降のオランダによる支配(1624-1662)にはじまり、明の鄭成功による支配(1662-1683)、清王朝による支配(1683-1895)、日本による支配(1895-1945)を経て、さらに国共内戦後の国民党による支配(1949-)のような変遷を経る中、台湾の先住民族は常に翻弄されてきた(かつて中日ドラゴンズで活躍した郭源治投手は阿美族出身)。慈済科技大の「台湾原住民資料館」には、これら先住民族の住居の模型や民族衣装、様々な漁具や小型の船などが展示されている。家族内で異なる言語を使用する状況については成戸 2008:98-99 でとり上げたのでそちらを参照されたい。

参考文献

『愛をこの世に注ぐ 慈済のご案内』，慈済人文志業センター(2011)。

浅岡高子 2007.「国際人の資質 ── 日本の大学関係者の視点から ── 」,『留学生教育』第 12 号,留学生教育学会,77-84。

天児慧・石原享一・朱建栄・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎編『岩波 現代中国事典』，岩波書店(1999)。

財団法人 アジア保健研修財団『アジアのこども』，明石書店(1994)。

釋證嚴著『靜思語(中文、英文、日文、西班牙文對照)』，慈濟文化出版社(再版 2012)。

『大愛灑人間 ── 證嚴法師的慈濟世界』，慈濟文化志業中心(2002)。

高木桂蔵 1991.『客家』，講談社現代新書。

『地球の歩き方 台湾』，ダイヤモンド・ビッグ社(改訂第 27 版 2016)。

成戸浩嗣 2008.「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み」,『コミュニティ政策研究』第 10 号，愛知学泉大学コミュニティ政策研究所，91-105 頁。

成戸浩嗣 2009.「コミュニティ政策学部学外研修講座 ──『フランスのコミュニティを知る』、『トンキラ農園と浪合小・中学校』 ── 」,『コミュニティ政策研究』第 11 号，愛知学泉大学コミュニティ政策研究所，109-123 頁。

成戸浩嗣 2010.「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み(2) ── 中国と日本 ── 」,『コミュニティ政策研究』第 12 号，愛知学泉大学コミュニティ政策研究所，111-126 頁。

山下利枝『耳が喜ぶフランス語』，三修社(2013)。

DVD《Portraits Taiwan Dharma Master Cheng Yen(台灣人物誌・證嚴法師）》，采昌國際多媒體股份有限公司(2006)。

［付記］

本報告のタイトルにおける「国際人」およびその英訳については、浅岡 2007 を参考としている。

（原稿受理年月日　2016 年 11 月 21 日）